高橋Tai対談

今月のゲスト▼

依田紀基 氏●囲碁棋士

当代一流囲碁棋士が語る、究極の一手「先を読まなくても見ただけでわかる」

囲碁は4000年以上の歴史をもち、碁を打つ際の発想や考え方は実社会に役立つことから政財界のあいだで多くの愛好家がいる。依田紀基氏は現代日本の囲碁界における第一人者として知られ、その打ち手に惹かれるファンも少なくない。今回は、自身も囲碁観戦を楽しむ高橋泰教授が、囲碁で強くなる秘訣や打ち手の考え方、話題になったコンピューター囲碁などについて聞いた。

構成・文=●●●●　撮影=●●●●

定石から踏みだすことが「超一流」への道

高橋　現在、日本の囲碁界にはプロ棋士が400人以上いるそうですが、そのうちタイトルをとれる棋士はごく一握りです。タイトルをとれる人とそうでない人の違いはどのようなところにあると思いますか。

依田　普段から持っている意識の違いかな、という気がしています。私は小学4年生の時に初めて囲碁を覚え、5年生で東京に出て日本棋院の「院生」としてプロへの道を歩みはじめ、安藤武夫先生*1に入門したのですが、この時、師匠の奥さんから「お前は、碁が強くならなかったら箸にも棒にもかからないよ」と言われたのです。学校の勉強が苦手で、成績は文字どおりの「オール1」でしたからそのとおりなのですが、この一言で子ども心に「このまま大人になったらまずいぞ」という意識と、覚悟が生まれました。

囲碁の世界では昔から、「故郷から遠く離れている棋士ほど強い」という話があります。そのくらい覚悟を決めて東京や大阪、名古屋に出てきているという意味ですが、じつは今、外国から来ている棋士がタイトルをとることが多いのです。確かに異国の地で何としても自分の居場所をつくるのだ」という強い意識を持っている気がします。

高橋　船井幸雄さんに教えていただいたのですが、新入社員を見ていると入社試験の成績が5年後の社員の業績に直結するかというと、まずそれはないそうです。家業を継ぐ「後継者」はたいてい、入社時の試験はビリのほうだけれど、5年後の成績はトップになっているというのです。学業ができれば良いコンサルタントになれるわけではない。自分が本当に経営を担わなければならないという覚悟がこの結果を生んでいると解説していました。

依田　それから「疑問を持つこと」も大事だと思います。誰でも、初めは真似から入ります。私の場合、呉清源先生*2の棋譜を見て「こういう碁を打ちたい」と思い、碁石を繰り返し並べて勉強しました。それを続けていくと「どうしてこういう手を打つのか」と疑問が湧いてくるのです。もちろんすぐに答えは出ませんが、疑問を念頭に置きながら勉強を続け、さらに進歩していくと「この手のほうがいいのではないか」と考えられるようになる。つまり、定石から一歩踏み出した新しい道ができてくるのです。その積み重ねが超一流への道ではないでしょうか。

高橋　言われたとおりにこなすだけでなく、突き抜けた世界をもつことはとても大事ですね。医師でも超一流になる人とそうでない人の違いを見ると、やはり教科書どおりにとどまらず、その人ならではの世界を持っている。私の友人も、学生時代から英語を勉強し続けて渡米して国内でも指折りの心臓外科医になった者、もともと右利きだったけれど左手で食事を続けた結果、身体のバランスが良くなり、当代一流の内視鏡の使い手になった者などがいます。

*1：安藤武夫（1938年～）。1957年、故・伊藤友恵七段に入門。58年入段、60年二段、61年三段、63年四段、65年五段、71年六段。2000年引退、七段。

*2：呉清源（1914～2014年）。中国・福建省出身。1928年来日、29年飛付三段、30年四段、32年五段、34年六段、39年七段、42年八段、50年九段推挙、84年引退。十番碁で当時のトップ棋士をすべて先相先ないし定先に打ち込み、第一人者として君臨。抜群の戦績と華やかな芸風で常に斯界一の実力者として遇せられた。

路盤が大きくなるほど「厚み」重視が必要

高橋　定石から踏みだす、思いもよらない一手を見るのは囲碁観戦の楽しみの一つです。なかでも依田先生は、とても思いつかないような手を打ちます。どのような考え方で打つ手を決めるのですか。

依田　大きく2とおりあります。一つは、その石が有効に働くところに打ちます。その石の筋道、可能性が大きくなりそうなところを見極めるのです。もう一つは「価値の高い、豊かな方向を生むのはどこか」をイメージします。

高橋　後者は即効性より、後になって効いてくる印象を持ちます。ただ、どちらを選ぶにせよ、依田先生の大局観が根底にありそうです。囲碁では「厚み」と「実利」のどちらを選ぶかという言い方もあります。「実利」とはほぼ確定した地のことで、「厚み」は強い石のエリアのことを指します。「実利」のほうが目

よだ・のりもと●1966年、北海道生まれ。安藤武雄六段門下。80年に入段してプロの囲碁棋士となる。84年、18歳で名人戦リーグ入り。91年、NHK杯で初優勝、以後、優勝5回。93年、9段。95年、10段。96年、碁聖。2006年、第7回農心辛ラーメン杯世界囲碁最強戦に主将として出場、三人抜きで日本チームに初優勝をもたらす。獲得タイトル数は35

に見える地を確保できますが、「厚み」は潜在的な力を蓄えるうえで必須とも言われます。

依田　大局観とはその場所で一番大きな場所はどこかで判断する際の視野、考え方といえますが、それは打ち手によって異なります。たとえば藤沢秀行先生*3と坂田栄男先生*4は全く違う大局観を持っています。藤沢先生は「厚み」を重んじて傾向が強く、そのためでなかなか崩れませんが、追い込みが利かず相手に逃げ切られることがありました。一方、坂田先生は逆に石を働かせることを重視し、不利な状況でも石を生存させる「しのぎ」の名人でしたが、一方で厚みが足りなくなることが見られました。

高橋　経営にも通じるお話です。目先のキャッシュ確保を優先するか、将来のリターンを重視するか。キャッシュを重視しすぎると長期的視点が損なわれますし、投資を重視しすぎるとキャッシュが回らなくなって「黒字倒産」を招くこともあります。

依田　一言でいえばバランスでしょうけれど、囲碁でもその時点で目に見える地が多いほうが優勢とは限りません。

「厚み」と「実利」を実社会に置き換えると、「実利」はお金とか値打ちのあるモノなど目に見えるもの、「厚み」は信用など目に見えないものとなるでしょう。一般的に対局に用いるのは19路盤、一回り小さい13路盤、さらに小さい9路盤もありますが、路盤が小さくなるにつれ、厚みより実利が重視されます。囲碁は人生の縮図と言われることがありますが、人生は19路盤よりもさらに大きく広くなりますから、社会が広くなるほど厚みを重視すべきかもしれないと考えたことがあります。

高橋　経営に置き換えて考えるなら、「厚み」はスタッフの教育、経営者の人脈ですね。困った時に頼れる人がどれだけいるかと。囲碁風に言うなら、困難な局面を「しのぐ」うえでも頼りになります。

＊3：藤沢秀行（1914～2009年）。本名「保」。1940年入段、42年二段、43年三段、46年四段、48年五段、50年六段、52年七段、59年八段、63年九段。98年引退。棋風は豪放磊落、「異常感覚」とも称される鋭い着想を見せ、「華麗・秀行」とも呼ばれた。一方、破天荒な生活でも有名で「最後の無頼派」と称すべき人柄は多くの人から愛された。

＊4：坂田栄男（1920～2010年）。1935年入段、同年二段、37年三段、38年四段、40年五段、43年六段、48年七段、52年八段、55年九段。2000年引退。本因坊戦で7連覇し二十三世本因坊。号は「栄寿」。選手権制初の名人・本因坊、7タイトル制覇、タイトル獲得64回など数々の記録を持つ。78年7月から86年6月まで日本棋院理事長。

たかはし・たい●1986年、金沢大学医学部卒業。同年、東京大学病院第1第3第2内科・麻酔科で研修。92年、同大学医学系大学院医学博士課程修了（医学博士）後、米国スタンフォード大学に留学。94年、ハーバード大学公衆衛生校に武見フェローとして留学。97年4月より国際医療福祉大学医療福祉学部医療経営管理学科教授、2009年から現職。主な著作に『TAI高齢者ビジュアル・ケアプラン作成』（日経BP出版局、共著）、『DPC実践テキスト』（じほう、共著）ほか

感動する手は読まなくても「見た瞬間」にわかる

高橋　対局を見ていると、「このあたりが良いのだ」と信念のようなものをもって打っている場面に出会います。後で振り返ると「確かにあの一手が効いたけれど、そこまでは読んでいないよな」と思うこともあります。依田先生の打ち手もそのイメージが強いのですが、いかがですか。

依田　確かに感動する手はだいたい、読んだ結果ではなく見た瞬間に「なるほど」とわかります。これは経験とか勉強の積み重ねといったものではなく、感覚的なものですね。

そもそも手を読むこと自体にはあまり意味がなく、正しい手を打っていれば棋理は知らなくてもいいのです。何十手先を読んでもその場面で一番良い手がわからなければ仕方がないわけで、逆に読まなくてもその場で一番いい手がわかればそれに越したことはない。読んだ結果、どこに打つかが重要なのです。

高橋　「将棋は読み8割、感覚2割。囲碁は読み2割、感覚8割」と言われます。これは私見ですが、将棋は読み筋を見て相手の打つ手を防ぎ、良い手を潰していくイメージがあります。一方、囲碁は相手の打つ手にあわせるというのもあるけれど、それ以上に自分のめざす手をめざしていくという感覚があるのです。

依田　将棋は囲碁より駒の動きがある程度決まっている面があります。将棋のほうが科学的要素は強く、囲碁のほうが芸術的要素が強いと言えるかもしれません。

人工知能「アルファ碁」の打ち手は美しかった

高橋　そのように感覚的な要素が強い囲碁で先日、グーグル・ディープマインド社の開発した人工知能「アルファ碁」が世界チャンピオンであるイ・セドル*5に勝ち、大きな話題となりました。依田先生はどのようにご覧になりましたか。

依田　驚きましたね。まさか自分が生きている間にコンピューターに負けることを想像する日が来るとは思いませんでした。アルファ碁はイ・セドルと対戦する前にヨーロッパチャンピオンと対戦し、5戦全勝しているのですが、棋譜を見るとまだまだイ・セドルには遠く及ばないと思っていたのです。

ところが見ていると、打っている間にどんどん強くなっていき、一局打つごとに、というより一手打つごとに強くなっている気がしました。はっきり言って、もう人間は勝てないと思いますね。

高橋　アルファ碁は、従来のプログラムとはかなり違う仕組みを持っているそうです。従来は何十手か先を評価する評価関数があって、1000とおりの手を打って評価関数の最も高い手を選んで打っていた。ところがアルファ碁のディープラーニングはそれとは異なる論理で判断しているというのです。依田先生が見て、棋理、つまり、碁における道理に沿った打ち方をしていると思われますか。

依田　アルファ碁がどの程度分析しているかはわかりませんし、手割りを知っているかどうかもあやしい。それでも、「なるほど」とうならされることはありましたね。

高橋　もう一つ。アルファ碁の打つ手に美しさはありますか。

依田　これがなかなか美しいのです(笑)。芸術的ですね。

＊5：イ・セドル(李 世乭)(1983年〜)。韓国の囲碁棋士。韓国棋院所属、九段。兄は棋士の李相勲。従来の定石・セオリーにとらわれない独創的で戦闘性の強い棋風から「囲碁界の魔王」とも呼ばれ、国際棋戦優勝十数回など、2000年代から10年代前半における世界最強の棋士と目されている。

囲碁で強くなるには人間の幅を広げるべき

高橋　医療も囲碁的要素が濃くなっている気がします。医療そのものはデジタル的な要素が強くなっているものの、今までは情報がないこともあり「局地戦」中心だったけれど、考えるべき局面が広くなっているのです。「病気を治す」という範囲を見るのか、それとも「生活全般」を見るのか、という大局観も求められるようになってくるかもしれません。

依田　藤沢先生は「囲碁は人間が打つものであるから、強くなるには人間としての幅を広げなければならない」と仰っていました。ご本人はかなり破天荒な人で、私が15歳の時に初めて教わったのですが、その時に「お前にはバカさが足りない」と言われて面食らいました(笑)。芸術に触れろと説かれたことをよく覚えています。藤沢先生の弟子の高尾紳路さん＊6に聞いたら「本を読め」と言っていたそうで、弟子の性格によっていうことを変えていたのかもしれません。

高橋　天才的な人はどのような思考過程を踏んでいるのかを想像するのは私の楽しみの一つなのですが、依田先生はまさしく天才的です。本日はありがとうございました。

＊6：高尾紳路(1976年〜)。故・田岡敬一に師事。故・藤沢秀行門下。1991年入段、92年二段、93年三段、94年四段、96年五段、98年六段、2000年七段、02年八段、05年九段。獲得タイトル数は14。